1 生まれてくれて　ありがとう

「生まれてくれて　ありがとう。」

みなさんが生まれたとき、わたしはこころからよろこんでこういいます。

わたしは、生まれてくる赤ちゃんのお手つだいをする助産師というしごとを、春日部市でしています。

助産師をはじめてから六十年、わたしは、この春日部市で何百人もの赤ちゃんをおかあさんのおなかからとり上げてきました。もしかしたら、みなさんのこともしっているかもしれませんね。

みなさんがおかあさんのおなかの中にいるあいだ、わたしは、いえをほうもんします。そして、おなかのいたみをすこしでもやわらげるようにおかあさんのせなかをさすったり、あんしんしてうめるようにげん気づけたりします。

（おかあさん、がんばって。赤ちゃん、がんばって。）

そして、二百八十日というながい月日をこえてみなさんはげん気なこえをあげて生まれてくるのです。わたしは、赤ちゃんをとり上げるたびに、じぶんの力で生まれてこようとする赤ちゃんの力、そしてその赤ちゃんをまもろうとするおかあさんの力をつよくかんじていました。

しかし、このしごとをしていてかなしいこともあります。それは、赤ちゃんが生まれても、すぐにおかあさんにあえないときです。生まれてきた赤ちゃんのからだのどこかにしんぱいなところがあると、赤ちゃんはおかあさんにあうまえにすぐにびょういんにいかなくてはいけません。

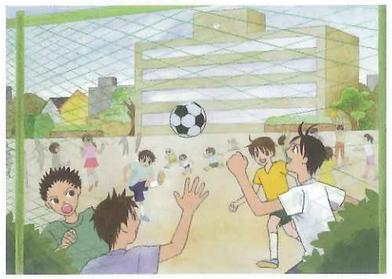
（早く赤ちゃんをだっこさせてあげたい。きっと赤ちゃんもだっこしてもらいたいだろうな。）

赤ちゃんのたん生はたくさんの人たちのこころをしあわせな気もちにしてくれます。じつは、このあいだとてもうれしいことがありました。わたしのとり上げた赤ちゃんが大人になり、こんどはおかあさんになって赤ちゃんをうみにきてくれたのです。

（いのちはつながっているんだな。）

わたしは、このしごとをしていてよかったなと、おもいました。

きょうのあなたはげん気ですか。

ごはんはたくさんたべられましたか。

小学校のまえをとおりすぎるとき、みなさんのげん気にあそぶこえがきこえると、ついつい足をとめてほほえんでしまいます。